

映画『月曜日に乾杯！』考 日常と優雅と記憶

桑 原 隆 行

オープニング

イオセリアーニ監督の映画を初めて観たのは、1992年、パリでのことである。『蝶採り』という映画である。その時はイオセリアーニ監督の作品であることも、もちろんイオセリアーニという監督名も知らなかった。誰の作品であるかなど気にせず、恐らく題名に惹かれて観に行ったのだと思う。『パリスコープ』に出ている内容紹介を見て、行きたい気持ちになったのかもしれない。なにしろ当時のパリ滞在はぼくにとって、少なくとも気分だけは永遠の日曜日だった。『パリスコープ』に目を通して、映画、芝居、美術館等の情報を確認して予定を決めるのが、毎日の日課のようになっていたのだから。翌93年に帰国してから書いた文章を、拙著『フェティシズムの箱』から引用させてもらう。

新しいところでは『蝶々狩り』*La chasse aux papillons* という映画（一九九二）に、フランスの城館の買い取り交渉に訪れる日本人グループが描かれていた。怒った女主人が「私の生きている間は売らない」と叫ぶと、「死ぬまで待ちます」と答えて彼女を唖然とさせるのだ。海外でも不動産売買に狂奔する日本人、確かにこれは現代的な一面だ。それでも映画の中での彼らの無表情は従来からある何を考えているか分からない日本人、感情が表にあらわれない能面のような日本人という固定した見方を踏襲しているように思える。さらに、将来自分たちの所有になるであろう城館を背景にともかくも記念写真という場面に到っては何をか言わんや。

シテ島のとあるレストラン（名前も住所も秘す）に行った折、我々が日本人とみるや女主人がこの店は日本人に買い取られ、十月から経営者が替わるのだという話をしてくれた。やる気をなくしたのか、料理の味も満足と言えるレベルには及ばなかったが、これは考えすぎかもしれない。金満国日本という生の現実をこんな風に意識させられるのだ。不況の声が風の便りにパリにも聞こえてきたけれど、それでも円高が加速していったのはどういうからくりになっているのだろう。いずれにせよ、その恩恵に存分に与ったのは幸運だった。

ご覧のように、『蝶採り』ではなく『蝶々狩り』と訳しているけれど、1992という年数が書いてあるし、イオセリアーニのフィルモグラフィーに明示されているこの映画の発表年1992年とも符合している。観たのは92年で間違いはないと思う。

イオセリアーニという名前を知り、初めて意識するようになったのは、早くても2004年のことだった。それと知らずに観た92年から10年以上の時が経過していたことになる。最初買ったイオセリアーニのDVDは、ここで取り上げる『月曜日に乾杯!』であり、これの出版年が2004年なのだ。面白かったので、続けてすぐに『素敵な歌と舟はゆく』も買った。『素敵な歌と舟はゆく』のパッケージに載っている宣伝解説でイオセリアーニというこの監督が『蝶採り』の監督であることを発見した。そうだったのか、なるほどねという思いだった。そして、DVDボックスが出たので、これ幸いと購入して、初期作品も観た。改めて、イオセリアーニの映画の不思議な魅力の虜になり、その時からいつか書いたり話したりする機会がないかと思いつけてきた。授業では時々思い出したように話題にはしていたけれど、意識的に取り上げて話題にしたのは、2006年の福岡大学オープンキャンパスでの模擬講義「フランス映画に乾杯!」においてである(『月曜日に乾杯!』というタイトルをもっていることが分かるだろう)。しかしながら、ぼくが本格的にイオセリアーニを扱うのは、この市民カレッジにおいてが初めてとなる。

DVD『月曜日に乾杯!』に付いているチャプターを以下に紹介しておく。(それにしても、DVDは読書好きのぼくには便利な媒体だ。本を読むように映画を読む=観ることができるからだ。本について論じるのと同じ気分と感覚で映画を論じたいと思い始めたのも、DVDで映画を愉しむようになってからだ。)

チャプター一覧

1. オープニング 2. 禁煙工場 3. 家にも平和はなし 4. 化学と歴史 5. サボリ 6. 壁画
7. ジタン 8. 恋する二人 9. 行方不明 10. 病床の父 11. 女装の旧友 12. ヴェニスへ
13. カルロとの出会い 14. マルティーノ侯爵 15. ピクニック 16. ヴェニス良いところ 17. い
ずこの父も 18. さらばヴェニス 19. 村は今日も淡々と 20. 帰郷

タイトル雑感

『月曜日に乾杯!』は内容(追々紹介していくけれど)に合致したタイトルだ。見終わった人には上手くストーリーが要約凝縮されたタイトル、主人公の気分に合った素敵なタイトルに思える。観ていない人には想像力を掻き立て、観たい気持ちに誘うタイトルに思える。ブルー・マンディーというような言い方もるように、月曜日は一般的に楽しい日曜日の後の憂鬱な曜日と相場が決まっている。だから、このタイトルは不意をつくのだから。一般に憂鬱気分と結びつく月曜日に乾杯とは、一体何故? こんなふうには好奇心を刺激された人は、もうこの映画を観るしかなくなる。映画の魅力的なタイトルは女の魅力と同じである。何もせずに通り過ぎることができない。どうしても見たい、中身を知りたいと思わせるのだ。

ところで、一般にフランス映画の原題は簡素で飾り気がない。素っ気無いと思えるほどだ。『月曜日に乾杯!』の場合もそうで、原題は *Lundi Matin*、「月曜の朝」となっている。『素敵な歌と舟はゆく』は、*Adieu, plancher des vaches!*、「さらば、陸地よ!」となる。フランス映画に与えられる日本語タイトルは、魅力的に装われた女のような。中身を知りたい気になってもらう、知ってもらうには、まずは素っぴんではなく化粧の顔で関心を惹き付けなくてはならない。

日本酒や焼酎の名前がイメージを掻き立て注文を促すように、チャプターも想像力を掻き立て、話題にしたい気持ちに誘う。お喋りの材料を提供してくれるのだ。「家にも平和はなし」だって? ぼくならこう言いたい、家に平和なし、平和があるのは家以外の場所だと。こうして我が家の雑然、混沌、混乱を無関係な第三者のように嘲笑するのだ。

「化学と歴史」、一体どういうチャプターなのだろう。化学という言葉に、ぼくの記憶は反応式のようにつながった。三浦しをん『私が語りはじめた彼は』に出てくる男の一人が中学の化学の教師をしていたはずだ。蜥蜴の入れ墨がある愛人の愛人をしていたことのある男。探してみたら、次のような箇所が目に入った。「女は薄くてシミひとつない、なめらかな背中を持っていた。そして右の太ももに、黒い蜥蜴を飼っていた。赤い目をしたそれにくちづけると、女はキュッと体を緊張させるのだ。つながりながらそこに唇で触れられないことが、僕はもどかしくてならなかった。」いいねえ、これは。(それに作品名にある、語られる「彼」は歴史の教授という設定なのだ。)

そして「サボリ」、何と誘惑的な響きだろう。それは優雅な遁走。意図的な雲隠れ、自らに与える解放の快楽、代わり映えのしない日常に穿たれた刺激的な亀裂なのだ。

「病床の父」、誰もこういう現実に向き合わなければならない時がやってくる。身近な人たちの病気や死。冷静に淡々と辛い現実を認識し受入れる一方で、辛気臭い現実を一瞬でも忘れるには言葉遊びや想像力が有効な手段になる。「病床の父」の代わりに、ベッドの女、ソファの恋人、美容院の美女といった言葉を連想してみたらどうだろう。「女装の旧友」、この言葉は谷崎潤一郎の『秘密』という作品を思い出させる。

「ヴェニスへ」、当然だ。幸福幻想、快楽幻想と結びついているのはイタリア、とりわけヴェニスなのだから。ジョルジュ・サンドとミュッセも行った。映画『年下のひと』(原題は *Les Enfants du Siècle*、『時代の子供たち』)では、この二人のヴェニス滞在が扱われている。女好きの諜報員007ことジェームス・ボンドだって行かないわけがない。運河沿いの小道は美女に接近するには、最高のロケーションではないか。映画『しあわせ』、『幸せになるためのイタリア語講座』の登場人物たちも行くのだ。恋人、妻、ホモの相手のそれぞれからヴェニス旅行をプレゼントされるバルニーという幸福で、不運でアタフタせざるを得ない男もいる。その旅行が同じ日の同じオリエント急行でなのだ。この難局をどう乗り切るのか(『バルニーのちょっとした心配事』)。アタフタ男バルニーを演じているのはファブリス・ルキーニ。ぴったりだよ。そして、ぼくはいつか行くことがあるのだろうか、恋と快楽の美しい共犯者、首の中央に蠱惑的なホク口を持つ女を同伴して。その女の肉体に迷い込み感溺するように、迷路のように道が入り組んだヴェニスという都市に迷い込み感溺

する未来を想像するのは興奮を誘う。(吉田吉重監督映画に欠かせない女優岡田茉莉子さんの首の真ん中にも、ホクロがある。どうしても、その魅惑の黒点に視線が行ってしまうのだ。)

以下に、DVDボックス(紀伊国屋書店)に封入されているリーフレットを参照して、オタル・イオセリアーニ監督作品を年代順に示す。

フィルモグラフィ

1958年：『水彩画』、1959年：『珍しい花の歌』、1962年：『四月』、1964年：『鑄鉄』、1966年：『落葉』、1968年：『グルジアの古い歌』、1970年：『歌うつぐみがありました』、1975年：『田園詩』、1982年：『白黒映画のための七つの断片』、1983年：『エウスカディ、1982年夏』、1984年：『月の寵児たち』、1988年：『トスカーナの小さな修道院』、1989年：『そして光ありき』、1992年：『蝶採り』、1994年：『唯一、グルジア(1：序曲、2：誘惑、3：試練)』、1996年：『群盗、第七章』、1999年：『素敵な歌と舟はゆく』、2001年：『月曜日に乾杯!』

イオセリアーニの映画はその時期によって大きく二つに大別できる。(最初の『水彩画』はソ連だけれど)75年作品『田園詩』までのグルジア時代作品と、それ以降のフランスを中心にした時代の作品。DVDボックスに入っているのは、『四月』、『歌うつぐみがありました』、『蝶採り』、『群盗、第七章』の四つである。グルジアについて、ぼくが知っているのは黒海に面した小さな国ということだけだ。グルジア、ぼくの中の異国趣味を掻き立てる響きだ。Gruziya、この綴りは音の類似で、ピエール・ロチの作品*Aziyade*へと連想を運んでくれる。いつのことだったか記憶がはっきりしないのだが、珍しいワインという謳い文句に惹かれて、グルジア・ワインを購入して飲んだことがある。

『月曜日に乾杯!』：ストーリー

まずはDVDのケースに付いている要約をそのまま引用するという、便利で簡単なやり方を取る。読んで想像してほしい。細部については、後でぼくの視点と言葉で徐々に、詳しく説明紹介がなされる。乞うご期待のほどを。

「ヴァンサンは、毎朝5時に起き、1時間半かけて工場に通っている。工場ではタバコも吸えず、単調な仕事をこなすだけ。家では雑用ばかり言いつけられて、お楽しみの絵を描くこともままならない。月曜日の朝、誰もが抱く憂鬱。もう、そんなあくせくした日常にさようなら! ワイン片手にヴァンサンは、一路“水の都ヴェニス”へ。ハブニングに見舞われながらも、美しいヴェニスの風景を肴に、飲んで、歌って、語らって……。ヨーロッパで絶大な人気を得ているグルジア出身の名匠オタル・イオセリアーニ監督の最新作がついに登場! 完成度の高さは言うまでもなく、あふれ出すほのぼのとした幸福感に、批評家やマスコミはもちろん、観客も大絶賛。毎日を忙しく過ごしているあなたへ、疲れた心を癒してくれるリフレッシュ・コメディ!」

上手くまとめている。「美しいヴェニスの風景」を見たくなるし、「ハブニング」も気になる。「ワイン片手に」、これもいいよなあ。同じく、ケースに付された謳い文句を引用する。「ちょっとヴェニスへ行ってきます。世の中上手くいかないことばかり。もう、そんな毎日にさようなら! 気の合う仲間と美味しいお酒を飲んでノンシャランといきましょう!」どうです? サボリ願望に火がつき、逃走の夢に捕らえられたらどうか。「ちょっとヴェニスへ」、このちょっとが優雅で心憎いよね。「気の合う仲間とお酒を飲んで」、この言葉はぼくの中では、「気になる好きな女とお酒を飲んで」というイメージに即座に変換される。そして、色っぽい感じで、ちょっと妖しい雰囲気していきたい。

スタッフ

一つの映画の製作に携わったスタッフについて、その映画を観る前から関心を抱いたり情報を得ようしたり名前を確認しておこうと思うのは、普通はマニアや批評家だけだろう。(天才バカボンのパパのように) それでいいのだ。一般の観客にとって過剰な予備知識は映画鑑賞の妨げになることがある。新鮮な驚きの余地がなくなるのだ。(すでにその作品を読んだことがある場合は別として) 映画のために予め原作を読んで出かけるのもよし悪しだ。思い切った映画の解釈が施されていて感心することがあるかもしれない一方で、風船のように膨らんでいた期待が失望に変わる場合もある。

映画を観る回数が増えれば増えるほど、宣伝チラシ、パンフレット、映画雑誌を見る機会も自然に増えて、蓄積される情報も増える。致し方ないことだ。しかし、多くの映画体験や読書体験があれば、ある時、不意に、何かがその記憶と思い出を蘇らせてくれる機会も多くなるはずだから、そういう偶然を楽しめばいい。例えば、ぼくの場合。今、『月曜日に乾杯!』のスタッフ紹介の欄に目を通して見た。監督はイオセリアーニだと知っているから、これはいい。製作のマルティーヌ・マリニャックという名前の後に『恋ごころ』、美術のマニュ・ド・ショヴィニの後に『パリでかくれんぼ』と、彼らが他に担当した映画の題名が書かれてある。嬉しくなる。『恋ごころ』も『パリでかくれんぼ』も、ジャック・リヴェットという監督の作品で、ぼくの好きな映画なのだ。なるほどね。そういえば、軽妙な驚き、遊び心の雰囲気、日常の平板さの中に不意に出現する一時の非日常、ヴァカンスのような特別の時間のような感じなどが三つの映画に共通しているかもしれない。

録音はジェローム・ティオー、『デリカテッセン』にも携わっている。『アメリ』の監督ジャン＝ピエール・ジュネの『デリカテッセン』、そのダークな気配も好きだった。音楽のニコラ・ズラビシュヴィリは、『素敵な歌と舟はゆく』のスタッフでもある。撮影はウィリアム・ルブシャンスキー。これまたリヴェット作品である『美しき争い女』の撮影担当だと記されている。『美しき争い女』のミシェル・ピコリとエマニュエル・ベアール、これまたいいよね。記憶が別の記憶を蘇らせたり、他の記憶につながっていく連鎖をぼくは愛しているのだ。特別の意識もなく、ただスクリーンの映像に釘づけになっていて、終わろうとする時に不意打ちのように何かを知るのも好きだ。『怪談』を観た。黒木瞳さんを始め、素敵な女優さんが何人も出ているからという理由だけだったし、夏は怖いものに触れて暑気払いが粋というものさなどと気取ってみたのだ。それに、お気に入りの女が

同伴してくれたのだから。美しく、怖い映画だった。映像の微妙な空気の変化が、恐怖を予感させる。予感は裏切られることなく、ぞっとする恐怖の映像が出現するのだ。(あまりに怖くて、隣の美しい連れにしがみついてしまいそうだった。次はそうさせてもらうからね。ぼくは怖がりの怖いもの見たさなのだ。)最後のクレジットを見ていて、監督名のところでなるほどと思った。ホラー映画『リング』の監督中井秀夫さんの映画だったのだ。恐怖の映像テクニックが巧妙にふんだんに用いられていたわけだ。こういう発見と納得も、ぼくは好きだ。

撮影のウィリアム・ルブシャンスキーについての解説文を、『アート系映画徹底攻略』(フィルムアート社)から引用しておく。「近年のゴダールやリヴェット作品の定番撮影監督として知られる。『ヌーヴェルヴァーグ』(90)や『美しき静い女』(91)で見せた、人工的な照明を排除した自然光のみによる美しい映像は彼の真骨頂といえ、撮影場所の進行形の空気をそのまま切り取ってしまう。『月曜日に乾杯!』の映像もまた、「人工的な照明を排除した自然光のみによる映像」なのだろう。このことを少しは意識の片隅にでも残して置いて、映像に注目しよう。さて、映画はクレジットに合わせて淡々としたピアノの音が流れ、主人公の朝の出勤風景から始まる。

場所、家、気になる箇所

(今、Sir Roland Hanna Trioの*Afternoon in Paris*という曲が聞こえている。ヒールの音も軽快に優雅に歩く女の隣にいるのはぼくだと想像してみる。さあ、映画の話を続けていこう。)

ヴァンサンの家があるのはどこか、地名が明確にされているわけではない。どこか郊外の古くなった一戸建ての感じが伝わってくる。郊外と思えるのは、彼が車を駅に置いて、電車に乗り換えて通勤しているからだ。古くなったというのも、帰宅して静かに画布に向かっていくとすぐさま、奥さんに壊れた雨樋の修理を命じられているからだ。

気になった、注意を引かれた箇所をいくつか指摘しながら、話を進めよう。それらの箇所は、最初に観た時も気になっていたようなぼんやりした記憶がある。ヴァンサンは脱いだサンダルをそのまま土の上に残したまま、車に乗り込み出かける。帰宅した時も、サンダルは朝と同じ位置から動かされることなく、そのまま置かれたままだ。これは十年一日のごとく繰返されてきた習慣、癖なのだろう。けれど、ぼくはその置かれたままのサンダルを物悲しい思いで見してしまう。そこに、家族に顧みられることもなく、気にも止めてもらえないヴァンサンのイメージを見てしまうのだ。トラクターも気になる。ヴァンサンの出勤と帰宅時間に合わせるかのように同じトラクターが出現する。帰宅時に通る時は、女が待っていてトラクターに乗り込む姿が映し出されている。長男が修理して、祖母の部屋に持ってくるモールス信号器。一体どうということなんだろう、これは。祖母が打ち方に詳しいのも不思議だ。受信している女子学生がいて、ぼくがアレッと思っている間もなく、今度はすぐ、その彼女が長男と待ち合わせしている場面が映し出される。(歴史好きの彼女と化学好きな彼は、歴史と化学をめぐる時々意見が対立するけれど、それでも仲が良さそうだ。)そう言えば、ヴァンサンが働く工場は禁煙なのだが、平気で吸っている者が多い。吸いかけのタバコを

そのまま白衣のポケットに入れた男がいた。赤い火が燃え出すのが見えたけれど、どうなったのだろう、不思議だ。

自然光を生かした映像という話はすでにした。ヴァンサンが工場をサボリ、丘の上の草むらに横になり、タバコをくわえてホッとした様子を漂わせながら、遠くに霞む煙を上げる工場を眺めるシーンがある。この時の映像が伝える空気の質感が美しい。

変人たち

(今、ぼくのパソコンからはサザン・オールスターズの歌が次々に流れている。いつにも増して暑い夏。夏はビールだ。夏はサザンだ。さあ、調子を上げていこう。)

ヴェニスに向かって走る列車に座るヴァンサンが映し出されるのは、開始から67分も過ぎてからのことだ。映画は127分だから、半分以上が過ぎてからということになる。もっと早く出発していたような印象があったのだが。記憶は当てにならない。それでも、見返してみると、この67分の映像があるおかげで、後半が一層引き立っていることが分かる。前半の平凡で風変わりな人たちで溢れた日常が、後半の夢のようなヴェニス滞在を際立たせる。見ているぼくにはどちらも面白い。ヴァンサンは自由な空気と気まぐれを制限された居心地の悪さを感じながらも、思うようにならない日常へのいらだちを押し殺している。嬉しい不意の出来事も好奇心を刺激する事件も何もないと彼は思っている。しかし、そういう日常にも、小さな驚きの数々が満ちていることを観客は目撃する。逆に、ヴェニスで、ヴァンサンは気ままな旅行者として、きらめくような非日常を生きているように見える。しかし、彼にとって特別な時間を生き、特別な場所にいると思えるヴェニスにも、普通の同じような日常が流れている。スリもいるし、親切な男もいるし、見栄を張り栄光を装いたがる侯爵もいることを観客は知る。

さて、愛すべき変人たち、風変わりな人々、明るい不条理のような出来事を見ていただこう。ただ並べて見せるだけで、チャプター5からチャプター11までの印象的な要約になる。

覗き好きの神父がいる。神の世界を覗き見るように、向かいの下着姿の女の部屋を覗き見るのだ。教会のお勤めに向かうために、上からロープを使ってすると降りてくる。

車椅子の人を親切に押してくる男がいる。親切? もういいと合図されたようでもあるけれど、男は何でもないように坂道の上で車椅子から手を放す。動き出して画面から消える車椅子。どうなるんだ?

ブルーの高級そうなオープンカーで出かける祖母。観客の心配を裏切るかのように、スムーズに止まるさっきの車椅子。当然決まっていたかのように自然に車椅子から降りて歩く男。そこにオープンカーが止まり、互いにタバコの火を着け合う。

オープンカーは墓地の門前到着。祖母は降りずに車内から墓守に供える花を渡して頼むと、さあーと車を走らせ去る。あれれ、いいの? ゆっくりお参りするのかなと思っていたら、さらりとクールに裏切られた。死者に対するこうした態度はさばさばしていて、気持ちがいい。(ぼくが、ディ

ジョンで乗ったワイン産地巡りのバスで出会ったマダムも、ムッシュの死をさらっと話していて魅力的だったなあ。今はこうして友だちと自由気ままに旅行に出かけることもできるし楽しいと言っていた。人生を謳歌している感じが表情に現われていて素敵だった。))

墓地からヘビを捕まえた男が出てくる。持参の入れ物に移している。随分、収穫があったみたいだ。どうするんだろう、これを？

葡萄畑が出てくる。木の小屋のようなトイレがある。やって来た男が、中の男に「図書館代りに長居するんじゃない」というような事を言って、早く出るように急かす。出てきた男は本を屋根に置いていく。入れ替わりに、急かした男は屋根から自分の本を取って中に入る。それぞれ、トイレに持ち込む専用の本を持っているらしい。糞尿を体外に出す場所は、知識であれ教養であれ何かを取り込みたくなる場所でもあるらしい。ブニュエルの映画のように便器の上で食事をする場合もあるけれど、普通はトイレでの食行為は忌避される。トイレでの読書は、体内から失われた分を何かで補充したいという食行為に代わる無意識の代替行為なのだろうか。

ジプシーの一団がやって来る。母子のような二人の女が、ヴァンサン家の庭に入って来て、奥さんらに手作りのカゴを売り込む。いつの間にか、みんな和気霽々となり、手相を見てもらっている。

二人の女の子が鱈を抱えて来て、ヴァンサン家の庭に置いていく。一体、この鱈は何なんだ。と思っていると、上から望遠鏡で覗いていた神父が、ヴァンサンの長男に鱈について何かしら学問的な知識を披露している。女だけではなく動物もまた、神父の覗き見の対象になることが分かる。神の寛大な目があまねく全てのものに注がれるように、神父の覗きと好奇の宏量な視線は、幅広く多くのものに向けられるかのようだ。それにしても、鱈はどうなったんだろう。

ヴァンサンの次男は自転車欲しくてたまらない。用途に合わせた自転車を何台も買ってもらってある友だち姉弟が、一台貸してあげる。それで、姉弟は父親に怒られる。次男が乗って行った自転車を、その友だちの父親が巨大な(何と呼ぶのか分からないけれど)車両ですぐさま回収していく。

巨大車両が走り去る道路脇にある電話ボックスで二人の若い女が電話している相手は牛飼いの男である。牛飼いの男は、教会で壁画描きをしているヴァンサンの長男にラヴレターの代筆を頼みにやってくる。二人のやり取りから、長男が以前から何度も代筆を引き受けていた様子が窺われる。神父の説教がなされる場所が、恋の言葉が代筆される場所に使われているのが可笑しい。

ポストに郵便回収がやってくる。回収人はさっきの蛇集めの男と同一人みたいだ。自転車のハンドルに蛇の入った瓶が引っかけてある。男の楽しみは、他人の手紙を開封して盗み見ることだ。蒸気に当ててきれいに剥がすやり方も手慣れている。常習行為であることを推測させる。元に戻すために、アイロンまで用意してある。牛飼いの真摯なラヴレターも、ほくそ笑む男の好奇の目にさらけ出され覗き見られるのだ。

帰りが遅い夫ヴァンサンを心配して、妻が人に聞いて探している場面が出てくるのは映画の51分過ぎのことである。そして、ヴァンサンが三人組の男にからまれている女を助けようとして、逆に殴

られる場面。この場面のことは忘れていて、覚えていなかった。ヴァンサンは病床の父親を見舞う途中だったのだ。この父親は不思議な妙に魅力的な人物だ。ヴァンサンに、叔母さんたちはお父さんが死ぬのを楽しみに待っているんですよ、と言われると、元気に起き出す(仮病だったのか、これは)。そして、遺産狙いの女たちを息子と二人で追い払うのだ。旅に行きたいと言っていたヴァンサンに、ヴェニスへの友人への紹介状と色々な国の紙幣を与えて旅行を勧める。父親は、ヴァンサンが貼ったトランプを狙って、離れた位置から鏡を覗いて後ろ向きで銃を発砲するけれど、当らない。そして、腕がおちたとつぶやくのだ。

父親の許から帰る途中、ヴァンサンはカフェで盛り上がる退役軍人(なのかな)の団体に勧められるまま、飲んで酔う。トイレで吐く。そのトイレのおばさん(マダム・ピピ)の仕事をしているのが、昔の友だちポール=ロベールであることが判明する。(監督がその俳優に、マダム・ピピという言い方の指導をしているのを特典映像で見ることができる。そして、二人で笑っている。ぼくも笑う。ピピ、つまりはおしっこのことだから。)失業した彼は女装してこのトイレ係の仕事をしているのだ。彼は介抱がてらヴァンサンを自分の所に連れていき、泊めてやる。彼は、ソフィーとマルチーヌというぼってりと肥えたグラマラスで、可愛い女友だちを同居させている。それは、テーブルをえさ場と散歩場所にする二匹の齧歯目^{げっしむく}、一般的な呼び方をすると二匹のネズミだ。ポール=ロベールはヴァンサンに絵具や絵筆を与える。彼もまたヴァンサンに旅を、旅先で好きな絵を優雅に存分に描いてきたらどうかと勧めるのだ。

(一般には揶揄の対象だったり、嫌悪や恐怖混じりの否定的イメージで捕らえられる変人、異質の人、アウトロー、異形の者たちは、少なくとも映画の登場人物である限りは、ぼくの興味を引く。妖しい謎の女ももちろん好奇心を掻き立てる。関わりのない立場にある安心感から、無邪気に見て楽しんだり怖がったりできる。また、自分の中にも彼らと同じ癖や偏執性、何らかの共通点を見出して、自虐的な皮肉な内向的喜びに浸るという楽しみ方もある。花の甘美な蜜に引き寄せられる虫のように、女たちのセクシーな魅力に溺れる幻想に耽るのも選択の一つだ。『奇人たちの晩餐会』、『フリークスも人間も』、『神経衰弱ぎりぎりの女たち』、『フリークス』、『気取り屋』、『死刑執行人もまた死す』、『高速ヴァンパイア』、『コブラ・ヴェルデ』、『アロマ神父の罪』、『10億分の1の男』、『浜辺の女』、『裏窓の女』、『地獄に堕ちた勇者ども』、『月世界の女』、『わらの男』、『キラークラウン』等々。だから、ぼくがこういうタイトルの映画が好きだったり、それらに惹かれてしまうのも当然なのだ。)

『映画事典』から『素敵な歌と舟はゆく』の項目を引用紹介

Larousse社から出ている *Dictionnaire des films* がある。世界中の映画が紹介されてある面白い事典だ。知らない映画のこと(スタッフ、キャスト、ジャンル、時間など)をちょっと調べたりするのに便利だし、観たことのある映画については第三者の視点や解説に目を通すのも興味深い。例えば、(ぼくがそのDVDボックスを持っている)成瀬巳喜男という日本人監督の映画『めし』(原節子と上原謙が出演)は、そのまま *Le Repas* というフランス語タイトルで紹介されている。解説は

フランス語で五行。「簡素極まりないお話。浮気されて、母親の所に戻る女が懸命に生きていこうして、最後には夫の所に戻ることを承諾する。苦しみ様も控えめで、女性たちが決して勝つことのない、狭く重苦しい世界。」こんなふうの内容が要約されている。

今ここではフランス映画の話をしているけれど、最近よく観るのは日本映画が多い。以前の日本映画（小津安二郎、成瀬巳喜男、今村昌平、吉田喜重、新藤兼人等々）もいいなと思うし、現代の日本映画も面白い。映画も食も女性も本も日本のがいいと思える。こんなふうにはぼくは、自分の中の断固たる強固な日本人性を意識させられるのだ。ぼくが持っているのは、2002年版で、一万一千本以上の映画が載っているのだが、『月曜日に乾杯！』は載っていない。気になって、曜日が題名に使われている映画を調べてみた。原題が何語であれ、そのフランス語タイトルを日本語訳して、列挙する。『血が出る火曜日』、『13日の金曜日』、『土曜日の夜の興奮（サタデー・ナイト・フィーヴァー）』、『土曜の夜と日曜の朝』、『他の日曜と同じような日曜日』、『ニューヨークの日曜日』、『八月の日曜日』、『人生の日曜日』、『ヴィル＝ダヴレの日曜日』等々。イオセリアー二で載っているのを確認できたのは、『素敵な歌と舟はゆく』一つだけだ。そういえば、最近、DVDで観た『木曜組曲』という日本映画がある。監督は篠原哲雄。鈴木京香、原田美枝子、富田靖子、西田尚美、加藤登紀子、浅丘ルリ子、6人の女優さんが共演している。一人の女の死をめぐる物語。そして、室内劇のような構成。これらの点から、映画好きの連想は即座にフランソワ・オゾンの映画『8人の女たち』へと飛ぶ。思い出した、若い頃の加賀まりこさんがキュートな魅力を発揮している『月曜日のユカ』という映画もある。監督は中平康。

『素敵な歌と舟はゆく』の内容紹介を以下に引用する。イオセリアー二映画には共通して、明るく絶望や開放的な倦怠、面白い雲がいくつも浮かぶ青空のようなカラッとした空気、雰囲気、奇妙な人間たち、奇抜な気晴らしと思いがけない関係性が満ちていることが分かる。

ビジネス・ウーマンで歌手の母親と大のミニチュアの自動車好きで酒好きの父親の間で、ニコラは家族の館で退屈している。気晴らしに彼は毎日パリに出かけて、一連の悲壮で滑稽な社会の脱落者たちに出くわしながら、窓拭き人や皿洗いをしている。強盗行為に誘われて刑務所に入れられる。出所すると、社会は相変わらずあまりにワクワクするものがないままだ。明らかにオタール・イオセリアー二は、人生に大した意味はないし、だから自分が語る物語に大した意味を与えるのは無駄だと思っている。しかし、彼には独創性と、楽しげな絶望を実践するセンスの良さがあるのだから、私たちに提供される突飛な楽しみを好まない理由など何もない。

ヴェニスと優雅

映画開始から67分経過。ヴァンサンはヴェニスに向かう列車内に座り、ワインを瓶から直にラップ飲みしている（ヴァンサンにとって優雅な時間がここから流れ始め、彼に同行する観客の気分も優雅に染まる）。そして、思い出したかのようにバッグから、あの父親にもらった紙幣を取り出し

て一部を財布に移し替える。座席正面の読書するマダムは気になるみたいで、目にうっすらと好気の色を浮かべてそれを見ている。

降りたヴェニス駅の外はすぐ乗船場になっている。これから、観客は運河の水に影を落とす家並み、波と光、白い跡を残して航行する船が行き交う海、陽光が降り注ぐ橋、広場、人々、ほの暗い墓地とその先の砂浜、光の中に見える僧服を捲り上げたシスターたちの脚、屋根の上からの眺望等々を見ることになる。目の楽しみを優雅に享受することができる。撮影のルプシャンスキーが自然光の下で撮ったヴェニスの空気、精神のようなものに触れているような気になるのだ。

マダムは舟に乗り込み、荷物を運んでくれたヴァンサンともう一人の男カルロに投げキスをして優雅に立ち去る。まるで、旅を楽しんでね、ありがとうとも言うような、ヴェニスの街からの歓迎のしるしのキスでもあるかのようだ。(投げキスに愛を乗せて飛ばしてよこすのが上手い女がいた。もちろん、彼女は本格的なキスも巧みだったけれど。欲望に駆られると激しくキスを求めて来る女もいたし、緩やかなキスが急激に昂まり欲望に点火する女もいた。その女たちがもう過去だとすれば、予期できない不確かな未来が贈ってくれるかもしれない女はどんな女なのだろう。これこそが願っていた女だと思えたら、唇の接触を試してみることにする。)

ヴァンサンのヴェニスでの行動、彼の目に映るもの、遭遇する出来事。本来だったら好ましいとは思えないことや被害さえも、どれもが、優雅という視点だけに限定して見ると、無責任な立場の第三者である私たち観客には優雅に見える。旅行者気分で目の前に展開することに関心が向けられているヴァンサンは早々に、スリにやられても気づかない。気がつくまではいい気分でいられるのだろうし、気づいても、それは楽しませてくれるヴェニスに知らずにお布施を捧げたのだと思えばいい。それも優雅だ、などとぼくは寛大な笑みを浮かべるのだ。

ヴァンサンは、運河沿いの道に画架(イーゼル)を並べた画家たちの絵を面白そうに見て歩く。そして、自由に絵を描きたくて家庭人と勤め人の義務をサボって逃げてきたことを卒然と思い出したかのように、運河の水で絵具を溶く。優雅。その目の前をゴンドラが水を揺らして滑っていく。優雅。どうもヴァンサンは買った絵葉書に何やら認めて、青色のポストに投函したみたいだ。優雅(ぼくは、それが留守宅の奥さんの怒りの手で二つに破られるのを知っている)。

ぶらぶら歩きのお楽しみを身を任せて歩くヴァンサンは、また会ったな、とボートの男に声をかけられる。マダムの荷物運びで協同したくだんのカルロだ。この後、カルロがヴァンサンの旅の案内人、宿泊引受人になってくれる。早速、ヴァンサンは父親がくれた紹介状の相手マルティーノ侯爵のアパルトマンに連れていってもらおう。

マルティーノ侯爵を演じているのは、イオセリアーニ監督その人である。侯爵はヴァンサンにとって恐らくそうであるように、ぼくにとっても印象に残る忘れられない、(さらに付け加えると)妙な人物だ。侯爵は紹介状に目を通すと、大急ぎで執事と一緒に室内を整える。肖像画を目につく場所へ移動して、ピアノの蓋を開けておく。窓を開けてバルコニーにスピーカーを隠す。何やら準備完了したところで、ヴァンサンが招じ入れられる。侯爵が秘かにスイッチを押すと、多くの民衆の

呼ぶ声がいかに外から聞こえてくるかのようにスピーカーから流れる。侯爵は窓を開け、バルコニーに出て、(実体は存在しない)歓呼の手に手を上げて応え、自慢気な表情を浮かべて戻ってくる。ウィスキーを所望するヴァンサンに、侯爵は驚きを押し隠して、ほんの少しだけ惜しそうに注ぐ。注ぐというより垂らす感じだ。ぐっと一気に飲み干してしまうヴァンサン。優雅。さあ、もう長居の必要もない。ヴァンサンにも観客にも、侯爵がありもしない栄光を装う見栄っ張り、貴族の寛大とは正反対のしみったれた人間であることが露呈しているのだから。

客人の前では取り繕っていたマルティノ侯爵の体裁と気取りは、客人の退去とともに急速に綻びる。遠慮のない夫婦喧嘩が勃発するのだ。罵りと非難の応酬。侯爵は、「お前を見たら食欲が失せた」というような悪態を投げつけて、寝室に閉じこもる。夫婦は喧嘩騒ぎが外のヴァンサンとカルロ、あるいは隣近所、ヴェニス中、スクリーンのこちら側の観客にアリアのように朗々と聞こえていることを知らない。知っていても気にする余裕もないのかもしれない。ヴァンサンのように、(それも他人の)夫婦喧嘩という面白い芝居をタダで聞かせてもらうのも、旅先ならではの優雅な経験だ。あとはまた、カルロのボートで次なる優雅と楽しみへと案内してもらえばいい。

カルロはヴァンサンと教会に寄る。神父を、浜辺でのピクニックに誘い出す。カルロは墓場を抜けていく途中で、おばあちゃんのお墓にワインを注いでいく。砂浜では仲間たちがワインを飲み、歌い、また飲む。ヴァンサンは、こうした楽しみながらのワインの飲み方には精神性が感じられていい、という感想を神父に言っている。ヴァンサンは海に向かって石を放って、ricochet、水切り遊びのことだが、リコシェをする。(ぼくの生まれは岩手県なのだけれど、子供の頃、北上川でよく水切り遊びをしたのを思い出した。上手いよ、ぼくは。出来るだけ、平らな石を選ぶことと、アンダースローで水面スレスレに投げることがコツ。リンゴの皮むきも上手なんだ。自慢してもしょうがないようなことばかりだけれど。みなさんにもあるでしょう？ これは上手いよということが。ちょっと訊いてみたいな。)

帰りはカルロのボートで、何人かの仲間たちと一緒に。途中に、目の楽しみを享受できる場所があるのだ。好色で親切な神が男たちに贈ってくれたかのような、修道院の中庭を覗くのに最適の場所。神に仕える修道女たちの光を浴びた脚を、運河に浮かぶボートに乗ったまま覗き見るのも優雅。神父は誘われても、この覗きの楽しみには加わらない。覗き趣味のあのフランスの神父とは対照的だ。恐らく所違えど、どこでも繰り返し同じように誰かによって窃視は行われてきたのだ。それにしても、監督によって彼女らを登場させる意図は違うのだろうけれど、パゾリーニ、フェリーニ、ブニュエル等の映画には修道女がよく出てくる印象がある。意図云々は別にして、それだけヨーロッパ社会の日常生活の中で、普通に神父や修道女が目撃されている現実の反映かもしれない。

(土曜の午前、今聞こえているのは、ミシェル・サルドゥーの歌。このCDはニューカレドニアのヌメアで買った。)

さあ、優雅の極め付けは夕景とワインだ。梯子を使って(それにしても、カルロの準備のいいこと)、カルロとヴァンサンは屋根に登る。オレンジ色の瓦屋根に座り、ワインを飲みながら、暮れ

ていくヴェニス街の眺望を楽しむのだ。ルプシャンスキーのカメラは、二人の視線に合わせるようにゆっくりと移動して、オレンジ色の屋根瓦の連なり、教会の尖塔、海を映す。カメラが捕らえた夕暮れ時の美しい微妙な空気の中に観客もまた、カルロとヴァンサン同様、身を置いている気になるほどだ。夕景、夜景という言葉は、夕焼けや夜景が好きだった女を懐かしさと悲しさとともに思い出させる。どれほど美しい夜景も一人で見るのは淋しい。好きな相手と見るからこそ、ロマンチック。ぼくにとって、今までで一番淋しかったクリスマスは1992年パリで過ごしたクリスマスだ。その年、一人でパリに滞在していたのだ。クリスマスになると、周りはみんな家族や友だちと過ごしたり、実家に帰ったりする。ぼくは独りぼっちになり本当に淋しくなった。シャンゼリゼ通りのきらびやかなイルミネーションが余計にぼくの孤独を意識させる。淋しく和食の店で寿司を食べてビールを飲んで、淋しく部屋に戻ったあの1992年のクリスマス。今思い出しても泣きたくなるよ、本当に。

優雅という言葉でイメージされる情景、体験は個人個人で様々だ。まずはぼくの場合から。ぼくは、アルセーヌ・ルパンが優雅に盗みを済ませて、これまた優雅にシャンパンで乾杯するのが好きだ。盗んだその足でそのままバカンスに出かける。優雅な泥棒ルパンはバカンスをも楽しむのだ。海辺や高級なりゾート・ホテルで美女とこれまた優雅にシャンパン・グラスを傾けて、見事な芸術的な盗みの成功に祝杯をあげる。ルパンは仕事の前にもシャンパン、盗みがうまくいくように、前祝いにシャンパンで乾杯だ。彼を追う警察とも平気で乾杯する。怪盗ルパンにはシャンパンが欠かせない。ルパンとシャンパンは切っても切れない関係にある。007に美女が、コロンボに葉巻が、ルパン三世に不二子ちゃんが、ぼくに恋とフランス語が欠かせないように。このように、いつでもどこでもシャンパンで乾杯する大様で自由なルパンの態度・生き方こそ、ぼくには優雅なイメージの一つだ。フランスに、印象派の画家たちがよく描いたエトルタ Etretat がある。大西洋岸の街で、砂浜ではなくて小石の浜が広がっていて、海には針のように尖った奇妙な形の岩が聳えている。ルパンの冒険の舞台 (*L'Aiguille creuse* という作品) にもなっているこのエトルタに、作者モーリス・ルブランの館があり、今そこはルパン記念館になっている。このルパン記念館はどうしても行きたい場所の一つだ。見学して、ルパン・グッズを買って、近くのレストランでルパンのようにシャンパンで乾杯できたら素敵で優雅だろうな、きっと。エイゼンシュテインというロシアの映画監督がいた。彼の映画のナレーションの中に「荘重な怠惰」という言葉が出てくる。これを真似て言うと優雅な怠惰ということになるけれど、気分はいつも優雅な怠惰。こんな感じで生きたい。一時期次のような優雅な気分が続いたことがある。夏祭りで石鹸が当たった。ただの石鹸じゃない。いいですが、シャネルの石鹸が当たった。ところで、パリのシャネルの店はカンボン通りという所にある。ぼくには無縁の場所なので入った事はない。誰かどうしてもという強い願望をお持ちの女性がいれば、喜んでご案内するけれど。それで、毎日入浴の際、シャネルの石鹸を泡立てて体を洗っていた。その香りを肌に残した湯上がりの体のままで、ワインを飲むわけだ。出来ることならルパンのように、シャンパンがいいけれど。至福の時間だった。これを優雅と言わずして何が優雅か。しかし、

この優雅な時間は、チャンネルの石鹸が小さくなり無くなると共に、泡のように消えてしまった。期間限定のはかない優雅な時だった。さて、あとは、みなさんのお話を聞かせてもらう番だ。

（映画の中の一つのエピソードのように）映画というものについて、谷崎潤一郎

谷崎潤一郎は映画好きの作家だった。小説の中にも映画（当時は活動写真、活動と呼ばれていた）のことがよく出てくる。さらに、谷崎は映画好きが高じて、映画用シナリオ執筆など、映画製作関連の仕事に積極的に関わっていく。

「今夜はみんな隙だから、活動へ行こうかと思って居たんですけど」（『人間が猿になった話』）

芸者の空き時間の楽しみは映画であることが分かる。それでも、次の文が示すように、中にはこの新しい娯楽に馴染めない芸者もいる。「わたし活動は眼がチカチカして頭が重くなるから嫌いさ。」（『人間が猿になった話』）

「二人が或る夜『みに座』の活動写真を見物して居ると、後ろのベンチに二人づれの若い女が腰かけて居た。」（『独探』） 谷崎潤一郎の作品世界に親しんでいる読者には、これだけで淫靡な雰囲気を感じられる。事実、その後、男の一人は女の一人と懇意になり、アバンチュールを楽しむのだ。

「活動写真と探偵小説とを溺愛し、日がな一日、不思議な空想にばかり耽って居たようであるから」（『白昼鬼語』） ここで映画は、小説の登場人物の退廃と懶惰の生活、狂気と幻想の昂進剤の象徴の一つになっている。「僕が浅草の公園倶楽部の特等席に座を占めて、活動写真を見て居たと思ひ給え。君も知って居るだろうが、彼処の特等席は、前の二側か三側ばかりが男女同伴席、後の方が男子の席になって居る。」（『白昼鬼語』） 大正時代の映画館の内部の様子分かる。映画、映画の見方は映画が上映される場所、建物に大きく規定、影響される。この問題については、加藤幹郎『映画館と観客の文化史』（中公文庫）が面白く詳しい。

以下は『アエ・マリア』からの引用だ。「私はいつもそう思っている、映画と云うものは人間が機械の力で作るようになった精巧な夢だと。」「そこにあるものはこの世のものゝ影に過ぎず、さてその無数の影どもはそのまゝ見る人の頭に巢喰って、そこで再び他のいろいろな影どもと交錯し、妄想の中で又新たなる夢を育む。何処までが映画の中の夢であり、何処までが自分自身の夢であるやら、その境界は遂にボンヤリして分らなくなってしまう。」「私が映画を見に行くのは美しい夢を買いに行くのだ。そこへ女を連れて行くのは、その女もその夢の中へ織り込んで見たいからだ。」谷崎はこんなふうに登場人物に語らせているのだが、ここには谷崎自身の映画観が投影されているはずだ。（ぼくも好きな女を映画に同伴するのは、一緒にスクリーンの映像世界に遊びたいから。幻想と夢のイメージ、欲望を募らせる刺激的なイメージを享受した後で、それを二人で現実のものにして体験したいという目論見もある。映画の後の食事とお酒、二人でバーのカウンターに並んで座る時間も優雅で楽しい。）

(映画好き、映画監督の立場からの)映画について、ジャン・ルノワール

ジャン・ルノワールはフランス映画の基本と上質を代表する監督だ。映画がサイレントで白黒の時代から監督を始めて、トーキーやカラーの時代になっても多くの面白い映画を発表した。サイレント映画に携わり、経験を積んだことのある監督たちは一般に、映画の本質・文法を熟知している(これが重要なのだ)。その体験的知が、カラー・トーキー映画でも存分に発揮される。小津安二郎しかり、ヒッチコックしかり。固有の映画美学とでも呼ぶべきものが確立されるのだ。しかし、ぼくには映画の原点、映画文法について具体的に論じる時間も能力もない。それで、『ジャン・ルノワールエッセイ集成』(野崎歓訳、青土社)から、監督の立場にあった人の言葉を引用する。それを基にして、映画について少し考えてみよう。ただし、それは網羅的、統一的なものではなく、あくまで挿話的、断片的な形でということになる。ぼくの単なる印象の範囲に止まるものに過ぎない。

「しかしながら私は、現在いたるところで目にする『国際派映画』なる言い方のうちに大きな危険を感じている。一本の作品のうちに、イタリアの地方色を少々、ウィーンのワルツ、スラヴの魅力、それにフリッツ・ラング流モンタージュを加えれば多くの観客にアピールできるものではあるまい。日本およびソ連では、幸いにして人々は反対の道歩んでいるが、それ以外の国ではどこでも、自分の国ならではのテーマを捨て去ろうとばかりしている。」この発言は1963年のものだが、ルノワールの危惧は今や世界的な現実になってしまっている。現在、区別の難しい同様な映画が菌のように世界を席卷している。そんな中、その国ならではの事情、問題、テーマが映し出されている異質の映画が新鮮な感じで見られるのは当然だ。例えば、ぼくは台湾の映画監督侯孝賢(ホウ・シャオシェン)の映画が好きなのだけけれど、その理由は上述したようなことにあると思う。ルノワールの40年以上前の指摘は、今もなお、今こそ正鵠を得ている。

「今こそ映画が、小説や大当たりした芝居を反映するというこれまでの役割から脱する時です。よく知られた作品の翻案というやり方によって、優れた映画が生み出されなかったわけではありませんが、しかし翻案の名の下に、すでに成功済で新鮮味を失い尽くした主題による、オリジナリティのない作品が、映画監督たちに押しつけられてきたことも事実なのです。」原作と映画との関係はルノワールの時代から今現代にまで続いている重要な問題だ。後に、トリュフォーは、原作に忠実なシナリオ作家らに非難を浴びせた。原作を用いるにせよ、監督の明確な考え、意図、テーマの下で省略・改変・作り替えを行う大胆さを要求した。これは、ルノワールの考え方の延長線上にある主張である。今、日本映画の多くが原作を基にしている。良く出来た面白い映画も中にはある。一方で退屈な映画もある。それは、原作への改変もない、工夫も創意もない臆病なだけの忠実がその原因だ。少しでも映画を楽しみたいと思うなら、原作は読まないででかけた方がいいという皮肉な考え方も成り立つ。でも、ぼくの場合、映画化のことなど予想もしないで、そのずっと前にすでに作品を読んでしまっていることが多いしね。今は、小説(=原作)と映画の協力関係、タイアップ、

相互宣伝なしには考えられないのが現実だと認めた上で、せめて監督には映画独自の視点、映画文法、映画の本質を意識して映画作りをしてほしい。日本語の作品が外国人監督によって映画化されることがある。その場合、原作の精神を生かしつつ、あとは大胆で自由な解釈で捕らえ直され、触発されるイメージが見事に映像化されていることがある。映画監督が原作との間に親密でありながらも、程よい対象化の眼差しを注ぐ距離を置いた関係を保って作ったかのような映画。ぼくが映画『午後の曳航』(原作三島由紀夫、監督ルイス・ジョン・カーリーノ)、『薬指の標本』(原作小川洋子、監督ディアヌ・ベルトラン)などがいいと思うのは、こうした理由から来ているのかもしれない。あるいは、美しい恐怖と濃密で妖しい愛、出演している女優さんの裸体に惹かれるからだと、シンプルに断言しておくこともできる。あるいは、海が出てくるから、とも言えそうだ。

「私が映画を好きになったのは1902年のことだ。当事八歳の私は、高等中学校の名を冠された、一種の上品な監獄に寄宿していた。」ルノワールのこういう「一種の上品な監獄」のようなひねりの利いた、洗練と諧謔混じりの言い方はいいですね。ぼくの場合、映画好きになった時期をはっきり特定することはできない。小さい頃、父親の自転車の後ろに乗せられて、映画館に連れていってもらったことは覚えている。何を見たかは記憶がはっきりしない。小林旭の渡り鳥シリーズ、植木等の日本一の男シリーズのような映画だったような気もするけれど、間違いかもしれない。よく分らない。

こんなふうに、ルノワールの発言はぼくには、どれもが興味深く思える。映画について考えるための示唆に富んでいるし、ぼく自身の思い出を誘発してくれるので。また、機会があれば、映画に関するルノワールの言葉を引用したい。さて、ここでまた話を『月曜日に乾杯!』に戻す。

ヴェニスと日常

ヴァンサンがヴェニス滞在を楽しめているのは、生活者ではなくて、責任から免れた気ままな旅行者の立場にあるからだ。しかし、彼には(そして彼の旅行気分を共有するぼくにも)カルロ初め、ヴェニスで知り合った人たちの生活が否応無しに見えている。単調でうんざりする仕事と家庭と日常生活を逃れてヴェニスに来た。確かにヴェニスはヴァンサンには優雅な逃避場所だ。けれど、そこにはカルロたちにとって、ヴァンサンが棄ててきたのと同じような仕事と家庭と日常生活がある。マルティエノ侯爵の所にも、しみったれた生活と夫婦喧嘩があったではないか。

ヴァンサンはカルロの家に泊めてもらう。ベッドの用意をしたり、二人が飲み食べ散らかした後片づけをするのは、奥さんと娘たち。亭主・父親は家では世話が焼けるぐうたら役立たずというのが相場だ。いずれも同じ。カルロが仕事に出かけるのは朝早くだ。ヴァンサンも同行する。まるで、前半で見たヴァンサンの出勤シーンを見ているかのようだ。というのも、工場の門の前には禁煙の表示があるのも同じなら、みんなが吸っていたタバコをその前で消して捨てていくのも同じなのだ。カルロはまたヴァンサンに付き合いたそうに見えるけれど、ヴァンサンに言われて中に入っていく。ヴァンサンはそれを見送って、(今度は旅行者の立場で)門の前から引き返す。こういう

同じような場面の繰り返しは、観客に所覚えどいずこも日常は、人間は同じようなものだという事実を、少し驚かせながら静かに効果的に見せてくれるのだ。

そう、人生は繰り返しなのだ。一度起こった事はまた起こるし、一度会った人にはまた逢うこともある。市内に戻ったヴァンサンは、財布がないことにふと気づく。スラれたのは前日のことだと観客は分っているけれど、当事者のヴァンサンはやっと今、被害に気づくのだ。そしてまた、スリに狙われるのだけれど、今度はすぐに気づいて相手に言う。「あいにく、今日は一文無しなんだよ」と釈明して、握手を交わすのだ。

ヴァンサンの目の前を貴婦人の乗ったゴンドラが優雅に通り返る。前に肖像画を描いてもらうためにキャンパスの傍に腰かけていた女性のようにも見える。あるいは列車で出逢った女性かな。一瞬の光景が、こうした想像へと誘うのだ。ヴァンサンはマルティエーノ侯爵を見かける。侯爵はヴァンサンを避けるように、そそくさと姿を消す。ボートで通りかかった男(恐らく昨日のピクニック仲間の一人)が、ヴァンサンに声をかけて、彼が働く大きな船での航海に誘う。その船のドアからヴァンサンが出てくる。何だか、仕事の服装になっている。手慣れた溶接の仕事を手伝うみたいに見える。何やら張り切って楽しげに見えるのは、勤め先の工場の仕事ではないからだろうか。役立ち必要とされる自分を再発見できた喜びだろうか。

帰宅あるいは繰り返されている日常

さて、映画では106分過ぎから場面はまた、フランスに替わる。あとは最後まで、郊外の村の日常が描かれる。ヴァンサン不在の間も、家族や他の住民たちの日常はことごとく淡々と過ぎている。観客は、まるでヴェニスの旅という中断などなかったかのように、前半で見た日常の続きに違和感なくそのまま立ち合ってきたかのように感じる。繰り返し、出来事の結末、小さな謎の解明、新たな挿話、ささやかな何気ない展開を目にすることになるのだ。

留守宅に絵葉書が届く。受け取る次男のガストンに、郵便配達人が「今度はピラミッドのだ」と言っているので、今までヴァンサンが絵葉書を何通も書いて寄越していた事と、実は何日も経過していることが分かる。ヴァンサンはどうも父親の勧めに従い、ヴェニス以外に色々な国を旅しているみたいだ。おそらく、あの大型船に乗せてもらった後、そのままヴェニスには戻らなかったのだろう。波まかせ、風まかせ、気分まかせのまま船旅を続け、どこかで下船する。そして、また、旅行者としてその街をのんびりと歩いてまわるのだ。絵葉書を渡す配達人は「破られないといいね」と言う。次男から絵葉書を渡された母親は何も言わずに二つに破って、捨てる。黙って旅行に出かけて暢気に遊び続けているヴァンサンに対して、妻の怒りは治まっていないのだ。捨てられた葉書は次男に拾われ、祖母に届けられる。葉書は祖母の手で元通りに修復され、同じ被害と手当てを受けた以前の何通もの絵葉書同様壁に飾られることになる。絵葉書をめぐる三人の役割が一系乱れない、ほとんど儀式のように感じられるみたいで、可笑しい。

長男ニコラと母親と祖母が庭に集まる。祖母の指示で土が掘り返される。これを、あの神父がちゃ

んと上から覗いている。同じように日常が繰り返されていたように、彼の覗き趣味も同じように繰り返されているのだ。埋められていたのは硬貨が詰まった壺。息子ヴァンサンにせいで苦しくなった家計を考えて、祖母がその隠し金を提供してくれる。

どうなったのだろうと、ぼくには行方が気になっていたあの鱈も再登場して、一安心だ。ちゃんといった！ 何やら古代風の衣装を模した格好の子供たちに抱えられて、一緒に写真のモデルに納まるのだ。

ニコラとガールフレンドがハングライダーで空を飛ぶ。眼下に小さくヴァンサンが、その歩く姿が見える。帰ってきたのだ。

神父が鐘を撞いている。教会では、あの牛飼いとセシルの結婚式が終わった模様だ。代筆を頼んで書いてもらったラブレター、セシルが読む前に妙な男に盗み読みされていたラブレターが功を奏したみたいだ。あの盗み読み男兼ヘビ捕獲男が、何故か結婚式の記念写真を撮るカメラマンを務めている。

エンディング

ヴァンサンが長い旅、長い寄り道、長い失踪から帰還する。彼は自宅のドアを開けて入った途端、まるで前日までの日常の続きみたいに振る舞う。ただし、その時だけは奥さんに文句・小言を投げる立場に立つ（今までは、毎日言われる側だったのに）。そしてワインではなく、ウイスキー（マルティーノ侯爵とは違い、奥さんがたっぷり注いでくれた）を飲む。奥さんも飲む。そして、ヴァンサンにタバコを一本所望するのだ。こうして、怒りは酒に解け、タバコの煙となって霧散して、何となく曖昧に暗黙の和解が成立するみたいだ。

母親の部屋に帰還の挨拶に行くヴァンサン。二人の話から、彼女は夫（つまりヴァンサンの父親）とは何かの事情で離婚したのか、別居生活を送ってきたことが分かる。（ヴァンサンが父親の見舞いに行った時に、ぼくは疑問に思っておくべきだった。）母親はヴァンサンに、楽しんだかい、というようなことを訊ねる。その問いかけに、ヴァンサンは「旅行だからね」と答える。この言葉にすべてが集約されている。日常生活も人生も、時々自分を旅人だと想像すれば、退屈さえ優雅に、平板さえ面白い変化の集合体に思えるかもしれない。自分を当事者でありながらも時には無関係な第三者のように、旅先にある気ままな旅行者のように見做してみよう。それが、映画を楽しむ観客のように人生を楽しむ、人生を面白い映画のように眺めるための秘訣だ。

翌朝のヴァンサンの出勤場面は、これもまた、映画の最初の出勤場面をそのまま繰り返し見ているような気がする。それでも、違いはある。ヴァンサンが勝手に旅に出て留守にしていた長い時間が、倦怠の色に染まり平板に見えた日常に少しだけ亀裂を生じさせ、嬉しい変化をもたらしたかのよう。ヴァンサンが降りていくと、奥さんが洗車している。そして、乗り込んだヴァンサンを見送る。いつまで優しさが続くかわからないけれど、この朝は少し優しくなっている。向かいのトラクター男（と、ぼくは名づけた）も仕事に出かけるところだ。あちらも同じく、奥さん（初めて見た）が優しくお見送り。そして、亭主を見送ったあとは、奥さん同士が共犯者のような笑みを浮か

べて視線を交わすのだ。まるで、亭主というのは困ったもんだわ、たまには優しくしてやらないとね、と言っているかのようだ。(ここで、また想像だ。トラクター男は、映画の始めの方で見た乗り込んでくる女と密会して情事を楽しんでいたのだろう。美味しそうな別の果実に齧り付いていたのだ。)

さて、ぼくの話は終わりだ。映画が終わり、暗かった場内が明るくなったら、退場しなくてはならない。現実の時間に戻らなくてはならない。急に夢から覚めるのも淋しい。もう少し楽しみと優雅の雰囲気を引きずっていたいなら、好きな相手と一緒にバーのドアを押せばいい。一杯引っかけてからでも遅くはない、日常に戻るの。

(ここに掲げた文章は、福岡大学エクステンションセンター主催市民カレッジ(会場・都久志会館)「フランスを知り、フランスを愉しむ」という講座の一つで話すために用意したものである。講座の企画は私(桑原)が立てた。専門委員会「フランス語フランス文学研究チーム」のメンバー遠藤先生、川島先生、ド・グロート先生にも参加協力していただき、講座は四回シリーズで行われた。私の担当日2007年10月16日、実際に話せたのは、準備した内の十分の一くらいだった。配布したプリントに関連する話題に移行したり、パンダの餌の食べ方を模倣実演してみせたりして時間が取られたせいもある。しかし、アラン・ロブ＝グリエの『快樂の漸進的横滑り』ではないけれど、話が横滑りし、逸脱し、迂回して別の話につながったり、思いがけない話が浮上してくるような事態こそが、講演の醍醐味であり面白さである。不意と予想外と唐突を自らも楽しみ、聴衆にも楽しんでもらえれば、それが一番喜ばしいことではあるのだが。しかし実際のところ、アンケートには不満の声が多かった。関心が様々で、興味の対象もそれぞれ違う聴衆を前に話す難しさを改めて感じている次第である。批判の言葉に落胆するのではなくて、反省する。その一方で、それらを次のように優雅で詩的で気取った表現に変えて遊ぶ余裕を持とう。それが次への意欲を掻き立てる有効な手段となる。例えば、話があちこち飛んで何を言いたいのか分かりませんでした、と書かれたら、多彩な絶えざる逸脱と表現し直す。話の筋道が不明確で結論がない気がしました、これは、永遠に続く序章とでも言い換えよう。声にメリハリが欠け、眠気と戦うのが大変でした、これは、多くの人を自然に気持ち良く眠りに誘う魔法の声で語りかけたのだと考えよう。)